

# NEWS LETTER

島根県立石見美術館ニューズレター

from Iwami Art Museum

February 2015 vol.21



グラントワ  
Grand Toit

企画展「HANAЕ MORI HAUTE COUTURE 森英恵 仕事とスタイル」

プロモーション・フィルム《THE WORLD OF HANAЕ MORI》

企画展「澄川喜一 シンプル・イズ・ビューティフル」

現在・過去・未来 彫刻家 澄川喜一の仕事

開館10周年を迎えて

100年に向かう10年

# 21



奈良原一高、田中一光、成島東一郎 共同監督《THE WORLD OF HANAЕ MORI》のワンシーン 1969年 島根県立美術館蔵

2015年4月18日(土)～6月8日(月)

休館日:火曜日(ただし5月5日は開館) 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B



C

A.《西陣折りの帯地を使ったジャケットとドレス》  
1965年 春夏

B.《菊のバジヤマ》 1966年

C.《蝶のカフタン》 1976年 春夏

いずれもデザインは森英恵、  
所蔵は島根県立石見美術館

## プロモーション・フィルム 《THE WORLD OF HANAE MORI》

企画展「HANAE MORI HAUTE COUTURE 森英恵 仕事とスタイル」は、当県出身のデザイナー、森英恵の60年にわたる仕事を総合的に紹介しようとする展覧会である。森の代名詞とも言えるオートクチュール作品はもちろん、舞台や映画の衣裳、制服、執筆活動などにも光を当てる。森英恵はどのような道程を経てクチュリエ<sup>※1</sup>となったのか。本人による著述<sup>※2</sup>にその様子をうかがうことができるが、作品を検証することで理解を深めたいと考え、本展を企画した。

展覧会の準備調査では、様々な場所に出かけ、これまで展覧会等で紹介されたことのない作品を数多く発見した。中でも1969年に制作された映画フィルム《THE WORLD OF HANAE MORI》(表紙)は、森がアメリカで発表した作品を多数見られる点で大変貴重である。森がオートクチュール組合に加盟したのは1977年。それ以前の12年間(1965-1976年)は活動の軸がアメリカに置かれた。この時期の活躍が評価され、森はクチュリエとしてフランスに迎えられた。

映像は20分間。森英恵の世界を、「日本」という国の文化とともに、アメリカを紹介する内容で、森の製品を取り扱っていたデパート「ニーマン・マークス」でクリスマス前に

開催されるイベントで上映された。写真家の奈良原一高、アートディレクターの田中一光、そして『心中天網島』の撮影で知られる成島東一郎、という豪華メンバーが共同監督した。

この中で見られる森の作品はどれも色が印象的である。最初に登場するのは歌舞伎や能の役者たち。白いスタジオで舞う彼らは、蝶や鱗など日本の伝統的な文様を活かした、鮮やかな着物地の衣裳をまとっている。白塗りに赤や黒で隈取りした化粧も、印象的に映される。別の場面では、絹シフォンを活かした軽色鮮やかなドレスを纏ったモデルが、コンクリート製の幾何学的な背景の前に佇む。時にはドレスの一部が大写しにされ、画面いっぱいに色が広がる。そうした間に山や川、花咲く野原といった日本の自然風景が挟まれる。森は自身の色彩感覚の根源に故郷の風景があるというが、衣裳と自然風景を交互に見せられると、そのことがよく理解できる。そして再度、着物を着用した、日本舞踊の踊り手が登場する。それにより森の色彩感覚は、伝統文化の中で受け継がれてきた日本古来の美的感覚に通じるのだと知らされる。

森の著作によれば、このアメリカ行きはとにかく準備に時間と手間を惜しまず、特に素

材選びに力を入れて、日本が持つ技術の高さ、洗練された文化の奥深さを示そうとしたという。最初は帯地なども用いた(図A)が、自分の考えをより効果的に表現できる、日本の薄い絹地に季節のモチーフや幾何学模様をプリントしたもの(図B、図C)を使用することが徐々に増えたという。プリント地を用いた作品の魅力は映画の中に鮮明に記録されている。絹シフォンが風を受け、大きく揺れると、衣裳は広がりを持ち、立体的な奥行きを獲得する。布地が重なり、色の濃淡や柄の交錯を生む。モデルや風の動きに応じ、衣裳はその表情を刻々と複雑に変化させる。それがなんとも美しい。ここにはっきりと森英恵の色彩感覚の鋭さを見て取ることができる。本展覧会では、マネキンに着せ付ける通常の衣裳展示では伝わりにくい魅力を、この映像作品によって紹介したいと思う。

オートクチュールでは「日本人としての創作」を追求した、と森は語る。日本の素材を用い、日本の伝統や風土に根ざした色づかいを活かすスタイルが、既に69年制作の映画においてみとめられることに注目したい。

※1 オートクチュールのデザイナー

※2 『ファッション—蝶は国境をこえる』(1993年 岩波書店)など

「澄川喜一 シンプル・イズ・ビューティフル」

2015年7月11日(土)～8月31日(月)

休館日:火曜日 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

企  
画  
展



図1

図1.《MASK》1982年 個人蔵



図2

図2.《木霊》2007年 個人蔵



図3

図3.《そのりあるかたちA》2011年 個人蔵

## 現在・過去・未来 彫刻家 澄川喜一の仕事

全ての事象の成り立ちには、起因(きっかけ)と経過(どう過ごしてきたか)が関係する。人ひとりの仕事を振り返るとき、そこには必ずと言っていいほど、過去から現在への道程のうちに「成るべくして成ったのか」と思われる一筋の理が浮かび上がってくる。

彫刻家・澄川喜一の起因のひとつは、これまで自ら語ってきたように、昭和25年、キア台風の襲来による岩国の錦帯橋の流出であろう。島根県の六日市町に生まれ、岩国市で高校生活を送っていた澄川は、戦後、それまで抑えつけられていた創作欲を一気に開放するかのように、足繁く錦帯橋の写生に通い、たちまちその不思議な構造と曲線美の虜となった。しかし、不落だと信じ込んでいた橋は自然災害によって、いともたやすく濁流に飲み込まれてしまう。それは18歳の少年にとって、価値観の根底が揺らぐほどの衝撃の出来事であったろう。

目の前で錦帯橋の崩落を見た彼は、その翌日、大水がひいた現場に再び立つ。そこには大橋の残骸(木と石の塊)が点在し、最期を迎えた大橋が一転、現代美術に転生したかのような迫力の空間が広がっていた。そして、そこに錦帯橋が本来持つ圧倒的な造形力のパワーを見せつけられたのである。相反するふたつの衝撃。この経験は、

絵描きになりたいと憧れを抱いていた高校生の彼に、彫刻家になるという決意を抱かせる。

錦帯橋はその翌年から始まった復旧工事で昭和28年に再建し、美しいアーチ状の姿を再び蘇らせた。以来、澄川にとってこの橋は今も変わらず特別な存在であり続ける。錦帯橋の他にもひとつ、昭和32年、東京藝術大学彫刻科の学生の時に目撃した、東京谷中の五重塔の焼失もまた起因のひとつだろう。「弁慶が沢山の矢を全身に受けて仁王立ちのまま絶命したような印象を受けました。(中略)細い材木は焼け落ちても太い柱は炭化して残り、倒れない。放火で燃えたから、炎も凄かった。巨大な護摩を焚いたようでした。」と語る。

「かたち」が姿を変えてなお、不思議な存在感を保ち続ける事への震撼。これらの視覚的衝撃は木や石という自然の素材に畏敬の念を抱き、造形の素材として、絶大な信頼を寄せることにつながっていったと思われる。こうした経験をどう受け止めるか、どう生かすかは、人によって全くベクトルが異なるところだろう。

とはいえ、彫刻家として歩む道(経過)は、決して平坦ではなかったと思われる。数多くの人との出会いや経験のうち、これぞと思う

発想の種を見いだして深層に重ね、模索を続けるうちに発芽するものもあれば、そうでないものもあったはずである。テーマの発見もそのひとつだろう。木という素材と日々、真摯に向かい合ううち、無理に彫り込んで人為的にかたちを表出するのではなく、素材の本質を活かし、その内奥に眠る力を惹き出すとはどういうことか。「そのりあるかたち」はそうした試行錯誤の中で生まれ、80歳を超えた現在も一貫して追い続けるテーマとなっている。

少年の頃に彼が抱いた錦帯橋の構造への疑問は、時が経ってのち、東京スカイツリー®のデザイン監修の仕事をはじめ、国内各所にそびえ立つモニュメントの成り立ちにも結びついている。現在・過去・未来と澄川喜一の仕事を振り返り、今も「かたち」に無限の可能性を追う、熱い背中を一緒に見つけてみよう。



## 100年に向かう10年

平成17年10月8日、島根県芸術文化センターは県西部・益田市有明町に大きな産声を上げた。愛称「グラントワ(Grand Toit)」はフランス語で「大きな屋根」。その名のとおり伝統的地場産品「石州瓦」によって、屋根はもちろん垂直に立ち上がる外壁全面を覆いつくす極めてモニュメンタルな外観をもつ。延床面積は19,000㎡。大小のホールを中心とした劇場部門と4つの展示室からなる美術館部門を併設する複合型芸術文化施設である。本年10月、その開設から10年の節目を迎えるのを機に、当館の来し方、行く末についてしたためたい。

その構想は平成3年にさかのぼる。島根県全体の博物館整備の方向性を検討する「博物館整備検討委員会」により県西部に「海に見える美術館」設置の提言がなされたのが発端である。平成6年、益田市に美術館を整備することを知事が表明。平成9年「基本構想検討委員会」により美術館単独での構想が検討され、この間に老朽化した既存施設・石西県民文化会館の建て替え事業と合わせ、平成12年「複合施設基本構想検討委員会」により芸術文化センターとしての整備の方向が示された。平成13年、コンペティションにより内藤廣建築設計事務所が建築設計者に決定。いよいよ施設の具体的な姿が見え始めてくる。

立地する益田市は西を山口県と接する島根県最西端に位置する。人口およそ5万

人。この人口規模に対して、本格的な複合文化施設の整備は過大と受けとめる向きもあった。設計者の内藤廣氏も当初、その疑問を島根県知事・澄田信義氏(当時)に呈したことがある。そのときの知事の返答を回想して次のように述べている。「20年も知事をやってきて、自分の県政の中で、県の西部、要するに石見地方には、財政が苦しくてなかなか手がまわらなかった。西部は高齢化と人口減少で落ち込みが激しい。だから、自分は最後にみんなの心の支えになるような文化の砦をあそこにつくりたいのだ、と言われたのです。」(内藤廣「形態デザイン講義」)この言葉のとおり当施設は地域の文化振興という役割を超えて、地域の核となり誇りとなることが強く求められている。

このことは当然、施設整備の枠にとどまることではなく、開館後の実際の運営、展覧会等の各種事業においてこそ引き継がなければならない。内藤氏は言う。「あの街は人口5万人の街で、最も高齢化率の高い島根県の端っこの端っこので、過去の遺産は、中世からの遺産をたくさん持っているけど、眠ったような街です。あの街がこれからもう一度復活をしていくには、多分ものすごく長い道のりが必要だと思うんです。…それはひょっとしたら100年という時間かも知れないし、200年という時間かも知れない。」(同書)

開設事業費は168億円。建築設計を進めるなかで、いわゆる地財ショックによる県財

政の急激な悪化と、予期せぬ土壌改良の必要に迫られ、二度の大きな事業費削減、設計の見直しを行った。整備中止も選択肢の一つとして議論された。開館は当初の予定より半年遅れた。こうした困難を乗り越え、開館にこぎ着けたのが平成17年10月8日のことである。街には祝祭的な気分、ある種の熱気が確かに満ちていた。

それから10年。館の運営は特に澄川喜一センター長の指揮のもと、地域密着のスタンスにこだわった。地域とともに歩むことによって、全国の文化施設のなかに埋没しない、この施設ならではの活動ができると考えた。施設の運営に関わるボランティアスタッフは約80名を数える。各種イベントやワークショップ、印刷物の発送、清掃、生け花など様々なかたちでサポートを受け支えられている。また美術館の年間パスポート会員は約1500名、劇場友の会の会員は約1800名に及ぶ。

美術館の展覧会事業においても地域との関係を重視しながら、「森鷗外ゆかり」「ファッション」「石見の美術」の3つの柱を中心に魅力ある企画を心がけてきた。今後もこうした地域密着、当館ならではの活動を継続することによって、担うべき使命を果たせるよう努めたい。その意味でこれまでの10年は、100年あるいは200年の継続に向かう、始まりの10年と考えている。

(椋木賢治 当館学芸課長)



開館当日の様子



中庭からのぞむ